

【特集】東日本大震災からの10年、そして、これから…

—現代行動科学会第38回大会テーマセッションから—

10年間の創作活動を通して振り返る、東日本大震災との向き合い方の変化

大坂 瑞貴（「塔」短歌会・有限会社丸高水産）

1. 東日本大震災発生当時の状況

私は高校一年生で、宮城県女川町の漁村集落に住んでいました。地元の町は壊滅状態、自宅も大きな被害を受けました。

2. 高校時代の詩と写真（震災直後）

私は震災以前から日常的に趣味として詩を書いていました。震災後に書いた詩を読み返すと故郷を失った寂しさや死生観の変化が反映された内容になっていました。書くことが気持ちの整理、心の支えになっていたのだと思います。

部活動として取り組んでいた写真では、普通の風景写真のつもりで作品展に出品した震災前の女川の写真が震災と関連付けた評価をされたことがありました。こうした経験から、故郷が「被災地」と呼ばれることへの拒否感を抱くようになりました。

3. 大学時代の短歌（震災から3～5年後）

大学在学中、サークル活動をきっかけに短歌を詠むようになりました。当時の作品からは震災以前を懐かしむ気持ち、戻りたい気持ちが強く、震災から目を背けたい思いもあったことが窺えます。

4. 会社員時代の短歌（震災から6～8年後）

仙台の会社で世論調査の仕事をしており、原発事故避難者の意見の調査にも関わりました。それが原発事故への視野を広げ、作品にも生かされるようになりました。また、津波で亡くなった祖母のことをやっと思えられるようになったり、震災について客観的に見た歌を詠むようになるといった変化もありました。

5. 最近の短歌（震災から9～10年後）

大学時代の作品と比べて、変化した今の故郷を受け入れられるようになってきました。コロナ禍と震災を関連付け、人類と災厄に思いを馳せる歌も詠みました。

6. 今感じている課題と、これから…

10年間の作品をふり返ると様々な心境の変化が見えてきましたが、高校生の時に抱いた“故郷が「被災地」と呼ばれることへの拒否感”だけは今も変わっていません。

これからは短歌を通して東北、少なくとも地元の女川町を、「被災地」という見方以外の色々な面から外部に発信していきたいと思っています。ただ、無理して声高にアピールするのは性に合わないので、日常の中で細部を見つめ、短歌を作り続けることを目標にしています。